

楽しげで騒がしい大学キャンパスのなかでも、そこへ一歩足を踏み入れると、ピリッとした緊張感のある、それでいて居心地のよい静かな空間。新品の本が並ぶ書店とは違った古い紙のにおい、本をめくったりペンを走らせる音。時に好きな本を読み、学習し、たまにその心地よさからウトウトしてしまうような——。私にとって図書館はそういう場所です。

今でこそ教員として自分の研究室をもち、自宅で自由なスタイルで本を読んだり研究をしたりしていますが、私が学生の頃は図書館が居場所のようなものでした。このエッセイでは、そうした私と図書館との思い出を振り返り、図書館の楽しみ方を探ってみたいと思います。

大学は高校までとは違い、個人の履修状況によって学校での過ごし方が異なります。友人と一緒に授業を受けることもあります。1人で空き時間を潰さねばならないこともあります。そうでなくてもなんとなく、1人でゆっくり静かに過ごしたい……というときもあるでしょう。

そんなとき、私はふらりと図書館へ行きました。図書館では、もちろん本を読むこともありますが、「図書館だから本を読まなくてはいけない」ということはありません。椅子に座ってポーッと窓の外を眺める時間もありました。今にしてみれば本当に贅沢な時間だったように思います。周りを見渡せば、学習する人、突っ伏して寝る人、イヤホンで音楽を聴く人……みな思い思いに過ごしていました。とにもかくにも、こんなふうに「あ、今日は図書館、行こうかな」「図書館でゆっくりしよう」という気軽さで利用できることは、図書館の魅力です。

私の母校の図書館は建屋が古く、天井も低く、鉄骨階段が昇降のたびにギンギンと軋む、ちょっと怖いようでワクワクする秘密基地のような雰囲気でした。所狭しと並ぶ書籍は、その背表紙を眺めるだけで興味をそそられます。そう、図書館は、この世界にどんな本が存在しているのかを知るきっかけとなる場所なのです。



図書館で
過ごす日常、
広がる世界

経営学部 横井桃子

自分の専攻分野の研究書ですら何万冊と所蔵されているのですから、すべての本を読むことはできません。しかし、じっくりと背表紙を眺め、どんなタイトルの本があるのかを知っておく。そうすれば、その時は手に取って読むことはなくても、実際に研究をする際に「あのとき見かけた本が役に立ちそうだな」と、再び出会うことができるのです。

私はこの経験に何度も助けられ、今も研究を続けることができています。そんなわけで、現在私の研究室には積読本がいっぱいあるのですが、これらの本も後々の研究で役に立ってくれることでしょう。

大学生になって初めて「学術論文」に触れる、という人も多いでしょう。私もその1人でしたが、最初はどのように論文を探せばいいのか、まったく分かりませんでした。そんな時に力に

なってくれるのが図書館のレファレンスの職員さんです。

私が大学生の頃（2000年代半ば）は、まだ電子書籍はもちろん機関リポトリや電子ジャーナルといった電子システムも主流ではなく、読みたい論文があるときは図書館へ足を運ばねばなりません。今でこそ電子システムが発達し手軽に論文を読むことができますが、探し方というのは誰でも最初は分からないもの。そんな時はぜひ、図書館にいるプロフェッショナルな「人材」も活用してください。所蔵されている資料を利用するだけが図書館の機能ではないのです。

以上、私なりに図書館の楽しみ方・活用の仕方をご紹介します。図書館でいろんな本や人に出会う自分の姿、想像してみてください。そして実際に訪れてみてください。たぶん、想像よりもきっと楽しいですよ。

大学で専門的に
学び始める人へ
おすすめ

ミネルヴァ書房の「やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ」、有斐閣の「有斐閣アルマシリーズ」は、当該分野の学術知識を幅広く習得できる入門テキストです。人文社会科学の多岐にわたる分野について刊行されていますので、みなさんの興味のある本がきっとあるはず。



よくわかる現代家族 第2版
(やわらかアカデミズム・「わかる」シリーズ)
神原文子、杉井潤子、竹田美知 編著
(ミネルヴァ書房 2016)
豊図開架 361.63:Ka48



Do! ソシオロジー
現代日本を社会学で診る 改訂版
(有斐閣アルマ; Interest)
友枝敏雄、山田真茂 留 編
(有斐閣 2013)
豊図開架 361:To61
名図開架 361:To61